①

『論語』に学ぶ人間学セミナー（令和二年十月十四日）

第5回　王陽明に学ぶ

三木英一

年譜略

王陽明の五十七年の生涯は波瀾に富んでいるが、概要をきわめて簡略に、年を追って記することにした。詳しくは王文成公全書付録の年譜を見られたい。

○一四七二（明の憲宗の成化八年壬辰）　九月二十日、余姚の瑞雲楼に生まる。
一四七六（成化十二年丙申）　五歳になって言語を発した。名を雲から守仁に改む。
一四八一（成化十七年辛丑）　十歳。一家会稽（紹興）に移る。
一四八二（成化十八年壬寅）　十一歳。父に随って北京に住む。以後数年滞留。
一四八四（成化二十年甲辰）　十三歳。母の鄭氏を喪う。
一四八六（成化二十二年丙午）　十五歳。天下経営の志を抱く。
一四八八（孝宗の弘治元年戊申）　十七歳。会稽に帰る。夫人諸氏を洪都（南昌）に迎える。習字に力を入れ、進歩があった。
一四八九（弘治二年己酉）　十八歳。夫人諸氏を伴い、余姚に帰る。途中、広信で婁一斎に謁し、格物の学を語る。
一四九二（弘治五年壬子）　二十一歳。浙江の郷試に挙げらる。
一四九七（弘治十年丁巳）　二十六歳。北京に寄寓し、兵法を学ぶ。
一四九八（弘治十一年戊午）　二十七歳。道家の養生説を談ず。
一四九九（弘治十二年己未）　二十八歳。進士出身に挙げらる。
一五〇〇（弘治十三年庚申）　二十九歳。刑部雲南清吏司主事を授けらる。
一五〇一（弘治十四年辛酉）　三十歳。命を奉じて江北地方を検察する。
一五〇二（弘治十五年壬戌）　三十一歳。五月病気休暇を願って会稽に帰り、陽明洞に室を築き、道家の導引術を修める。後、道・仏が人情の自然に戻るを悟る。
一五〇四（弘治十七年甲子）　三十三歳。再出仕して、秋、山東郷試を主管し、九月に兵部武選清吏司主事に改任。
一五〇五（弘治十八年乙丑）　三十四歳。詞章・記誦の学を排し、身心を修め、聖人となるを志す学を首唱し、門人を得て学を講ずる。湛甘泉（若水）と交わりを結ぶ。
○一五〇六（武宗の正徳元年丙寅）　三十五歳。宦官の劉瑾の専横を新帝に訴えて罪された戴銑・薄彦徽を救うために上疏し、帝の意に忤らい、廷杖四十を受け、貴州の龍場駅丞に貶謫される。
一五〇七（正徳二年丁卯）　三十六歳。家郷に帰る。海上に浮かび、舟上に逃れようとして福建に流さる。父に南京に会い、後、龍場に出発。
一五〇八（正徳三年戊辰）　三十七歳。春、龍場に到着。日夜端坐澄心して、聖人の道のわが性の外になく、心即理であることや、致知格物の本旨を悟る。蛮民を教化する。
一五〇九（正徳四年己巳）　三十八歳。貴陽提学副使の席書に知行合一の旨を告げ、彼を心服させた。貴陽書院を主り、貴陽の学生を教える。
一五一〇（正徳五年庚午）　三十九歳。廬陵県の知県に昇進し、江西に赴く。教化を主として治績を挙げる。十二月に南京刑部四川清吏司主事に昇進。
一五一一（正徳六年辛未）　四十歳。北京に在って、正月、吏部験封清吏司主事に任ぜられ、二月、会試同考試官、十月、文選清吏司員外郎に昇進。
一五一三（正徳七年壬申）　四十一歳。三月考功清吏司郎中に、十二月南京太僕寺少卿に昇任。赴任の途、会稽に帰省し、徐愛と学を論じた。伝習録上巻の前半はその筆録である。
一五一三（正徳八年癸酉）　四十二歳。十月まで会稽に在って、弟子を伴い、山水を優遊し、各地を周遊した。十月任地の安徽省の滁州に着任。山水の風景に富むので、閑職を利して弟子と各地に往来して学を講じ、時に数百人会して歌舞した。
一五一四（正徳九年甲戌）　四十三歳。四月南京鴻臚寺卿に昇任。五月南京に着く。徐愛も来て同志多く集まる。これまで学生に俗習を離れさせるため静坐を勧めて来たが、空虚に流れる弊を生じたので、着実ならしめるため、天理を存し、人欲を去る、省察克治の工夫を説く。「事上磨錬」を説く。
一五一五（正徳十年乙亥）　四十四歳。南京に在任。
一五一六（正徳十一年丙子）　四十五歳。九月都察院左僉都御史に昇任。巨賊の横行する江西の南贛、福建の汀・漳地方を巡撫し、十月会稽に帰る。
一五一七（正徳十二年丁丑）　四十六歳。贛州に赴き、二月漳賊を平定。九月提督南贛汀漳等処軍務を授けらる。楽昌・龍川を撫し、十月横水・桶岡の諸賊を平定。十二月凱旋して、南康に至る。
一五一八（正徳十三年戊寅）　四十七歳。※贛州にあって文武の事に力を尽くす。正月三浰を討伐。時に薛侃に与えた書中に「山中の賊云々」の語を挙ぐ。三月病気のため辞職を願い出たが許されず、大帽・浰頭の賊を平らげ四月に凱旋し、私学を立て教化に努めた。七月古本大学刊行。門人薛侃・欧陽徳らと講学して大学の本旨を明らかにする。朱子晩年定論の刊行。八月に薛侃が伝習録初本を虔州で刊行した。徐愛卒す。九月瀧溪書院の修覆。
一五一九（正徳十四年己卯）　四十八歳。寧王宸濠の反乱を討伐するため、六月吉安で義兵を挙げ、賊の根拠地南昌を抜き、宸濠を逮捕して、江西を平定した。

※「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」

一五一〇（正徳十五年庚辰）　四十九歳。天子の召しを受け上京せんとしたが果たさず、南昌に帰り、六月赣州に行く。途中羅欽順に返書を書く。

一五一一（正徳十六年辛巳）　五十歳。江西（南昌）にあって、正月始めて致良知の説を掲げた。宸濠討伐の中に心得したものである。陸象山の子孫を索める。白鹿洞書院で弟子に学を講じた。六月南京兵部尚書に昇任し、枢機に参与する。赴任の途、八月会稽に帰り、九月には余姚へ行って墓参をし、親戚朋友を会して宴遊した。錢德洪が二姪と入門した。十二月江西の賊を平定した功により、新建伯に封ぜられ、妻子にも恩給があり、父の王華に遣使見舞があった。

一五一三（世宗の嘉靖元年壬午）　五十一歳。二月父龍山公を喪う。御史の程啓充と給事の毛玉が、宰相の意を受け、陽明を正学を遏めたと弾劾した。

一五一三（嘉靖二年癸未）　五十二歳。郷里にあって学を講じた。陽明の新学に対する世の誹謗が次第に盛んになる。

一五一四（嘉靖三年甲申）　五十三歳。門人日に増加し、坐する場所のない程で、郡守の南大吉も門生と称した。八月天泉橋で門人を宴した時、集まるもの百余人あった。十月南大吉が伝習録の続録を刊行した。

一五一五（嘉靖四年乙酉）　五十四歳。正月夫人諸氏卒す。稽山書院尊経閣記を作る。喪を終えたので、礼部尚書の席書や御史の石金らが復職を上疏したが、用いられなかった。九月余姚の龍泉寺に諸生を会し、毎月一・八・十五・二十三の四日開講することに決める。顧東橋（璘）に当て拔本塞源論を書く。十月陽明書院を、会稽城の西郭内、光相橋東に立てた。

一五一六（嘉靖五年丙戌）　五十五歳。南大吉・欧陽德・聶豹に書を与える。錢德洪と王畿が会稽に来たので、初学の士はこの二人に先ず指導させることにした。長子正億生まる。母は継室の張氏。

一五一七（嘉靖六年丁亥）　五十六歳。四月鄒守益が文録を広徳州で刊行した。五月急に都察院左都御史を兼ねて、広西の思・田を征せしめる。辞したが許されず、九月越を出発。途中、錢德洪と王畿とが天泉橋上で、王学の根本について質問した。南昌・吉安を通る時に諸生に学を講じ、十一月肇慶に着き、やがて梧州に着き、命により両広を兼理巡撫した。

一五一八（嘉靖七年戊子）　五十七歳。二月に思・田を平定。四月に思田学校、六月に南寧学校を興して、辺地の住民の教育を図った。七月、八寨断藤峡を襲って、数万の賊を破る。十月、病気劇しく、休暇を願ったが許されなかった。増城にある五世の祖、綱の廟を祀る。十一月二十五日、梅嶺を越えて江西の南安に着く。喘咳甚だしく、二十八日、青龍舗に泊し、二十九日の辰の刻逝く。遺骸は南野駅で納棺し、赣から南昌に運ぶ。

一五一九（嘉靖八年己丑）　正月、南昌で喪を発し、錢德洪・王畿と養子正憲が出迎えて、二月会稽に着く。十一月、会稽を去る三十里、蘭亭に入る五里の洪溪に葬る。

伝習録

（『新釈漢文大系』明治書院）より

伝習録は、王陽明の語録の全部と、弟子及び時人に答えた書簡の選録であって、陽明学の本質を知る基本書である。上・中・下の三巻から成っているが、各巻それぞれ成立の時期と事情を異にする。最初にできたのは、徐愛の筆録した上巻の初頭の十四条のみであって、それに伝習録の名がつけられた。伝習とは、論語の「伝不習乎」からとった。この原本に陸澄と薛侃の筆録を加えて、明の正徳十三年（一五一八）陽明四十七歳の時刊行したものが今の上巻である。中巻は、嘉靖三年（一五二四）陽明五十三歳の時、南元善が伝習録下巻として前書に合わせて刊行したものであり、下巻は、陽明の没後二十八年を経た嘉靖三十五年（一五五六）に錢德洪が、前二書に洩れた語録の集に手を入れて刊行したものである。このため、上巻には四十歳前後の語が多く、中・下巻は五十歳以後晩年のものが主となっている。陽明の思想は五十歳以後に大成したから、もしその精髄をまず知ろうとするなら、下・中巻から読み始めるのが便利であり、思想発展の順序を見ようとするなら、巻を追って行くのがよいといわれる。いずれにせよ、陽明の人物と思想の一般に通じておくことは、伝習録を読む予備知識として必要と思われるので、以下、略述して、読者の参考に供する。

「知行合一」

5-Ⅱ 愛曰、古人說知行做兩箇、亦是要人見箇分曉。一行做知的功夫、一行做行的功夫、即功夫始有下落。先生曰、此卻失了古人宗旨也。某嘗說、知是行的主意、行是知的功夫、知是行之始、行是知之成。若會得時、只說一箇知、已自有行在。只說一箇行、已自有知在。古人所以既說一箇知、又說一箇行者、只爲世間有一種人、懵懵懂懂的、任意去做、全不解思惟省察。也只是箇冥行妄作。所以必說箇知、方纔行得是。又有一種人。茫茫蕩蕩、懸空去思索、全不肯着實躬行。也只是箇揣摸影響。所以必說一箇行、方纔知得眞。此是古人不得已補偏救弊的說話。若見得這箇意時、即一言而足。今人卻就將知行分作兩件去做。以爲、必先知了然後能行。我如今且去講習討論做知的工夫、待知得眞了、方去做行的工夫。故遂終身不行、亦遂終身不知。此不是小病痛。其來已非一日矣。某今說箇知行合一、正是對病的藥。又不是某鑿空杜撰。知行本體、原是如此。今若知得宗旨時、即說兩箇亦不妨。亦只是一箇。若不會宗旨、便說一箇亦濟得甚事。只是閒說話。

愛曰く、古人の知行を說いて兩箇と做すは、亦是れ人の箇を見て分曉ならんことを要む。一行は知の功夫を做し、一行は行の功夫を做して、即ち功夫始めて下落有り、と。先生曰く、此れ卻つて古人の宗旨を失(了)ふ。某嘗て說けり、知は是れ行の主意、行は是れ知の功夫、知は是れ行の始にして、行は是れ知の成なりと。若し會得する時は、只だ一箇の知を說くも、已に自ら行の在る有り。只だ一箇の行を說くも、已に自ら知の在る有り。古人の既に一箇の知を說き、又一箇の行を說く所以は、「只だ世間に一種の人有り、懵懵懂懂(的)として、意に任せて去き做し、全く思惟省察することを解せざるが爲なり。也只だ是れ箇の冥行妄作なり。所以に必ず箇の知を說き、方に纔に行(得)ひて是なり。」又一種の人有り。茫茫蕩蕩として、懸空に去いて思索し、全く肯て着實に躬行せず。也只だ是れ箇の揣摸影響なり。所以に必ず一箇の行を說き、方に纔に知(得)つて眞なり。此は是れ古人の已むを得ずして偏を補ひ弊を救ふの說話なり。若し這箇の意を見(得)る時は、即ち一言にして足る。今の人卻つて就ち知行を將て分ちて兩件と作して去き做す。以爲へらく、必ず先づ知(了)りて然る後に能く行はん。我如今且く去いて講習討論して知の工夫を做し、知(得)つて眞(了)なるを待つて、方に去いて行の工夫を做さんと。故に遂に身を終るまで行はず、亦遂に身を終るまで知らざるなり。此は是れ小病痛にあらず。其の來ること已に一日に非ず。某の今箇の知行合一を說くは、正に是れ病に對するの藥なり。又是れ某の鑿空杜撰にあらず。知行の本體、原是れ此の如きなり。今若し宗旨を知(得)る時は、即ち兩箇と說くも亦妨げず。亦只だ是れ一箇のみ。若し宗旨を會せずんば、便ち一箇と說くも亦甚事をか濟(得)さん。只だ是れ閒說話のみ、と。

通釈 私は言った、「しかし、古人が知と行を二つに分けて説いたのは、人が見てよくわかるようにしたのであって、一方では知の修行をし、他方では行の修行をするようにすれば、修行に始めて手がかりができるのではないでしょうか。」先生曰く、「それはどうも古人の正しい説の主旨を取り違えているようだ。私が以前に言ったことだが、知は行の目的であり、行は知の実際の修行である。また知は行の始めであって、行は知の完成である。もしこの語の意味が分れば、知を説いただけで、行はおのずからその中にあるのであり、また行を説いただけで、知は自然にその中にあるのである。古人が一つの知を説いて、別にまた一つの行を説いたのには理由があることである。世間には特種な人間がいて、殆ど無意識に意の趣くままの行動をし、思慮反省ということを全く知らない。これはいわば盲目的な行動に外ならないから、こんな人間には知を説かなければ、行が正しくならないことが一つ。また他方には特別な人間がいて、際限のない抽象的な思索に耽って、着実な実行を全然しない。これは要するに当て推量や妄想に過ぎないから、この種の人には行を説かなければ、その知が真物にならないことが一つである。それ故、知と行を別にして説いたのは、古人がやむを得ず取った、偏りを直し、欠点を救うための便宜的説明であって、もしこの意味さえよく理解できたなら、知と行のどちらか一方をいえば充分なわけである。ところが、今の人は知と行とを全く二つに分けてしまおうとする。そして、『まず知ることが大切で、知ってはじめて行なうことができるのである。われわれは、今暫くの間研究討論をして知の修行をなし、真実に知ってから行の修行をしよう。』と言う。そのため遂に一生行なわず、また一生知らないで終ってしまうのである。これは決して軽い病気ではなく、その来原も至って遠い。私が知行合一を説くのは、正にこの病気への対症療法に過ぎないのである。しかし、そうかといって、私が勝手に作り上げた、いい加減なものというわけでもない。知行の本体は本来こうなのである。もし私の説く主旨が理解できたなら、知行は二つだと言っても構わない。それは結局一つのことなのだから。反対に、主旨が理解できなかったら、「つだと言っても何にもならない。それはほんの空言に過ぎないからである。」

語釈 ○古人説知行做両箇　経書に知を説き行を説くをいう。中庸には「生知安行、学知利行、困知勉行。」とある。○分曉　明らかにさとる。○一行　一方。○功夫　工夫に同じ。○下落　着落に同じ。帰着するところ。○主意　目的、目標。○会得　理解。○懵懵懂懂　ぼんやりして事理のわからぬこと。○冥行妄作　盲目的な行為。○纔　やっと。○茫茫蕩蕩　水の涯しなく広いこと。概念的知識のみを求めて、着実に実行しないことに譬えた。○懸空　宙に、空に。○揣摸影響　推し量ることと、実際にないことを妄想すること。○這箇　此れ。このもの。○将　「何々を」の「を」に当る。○鑿空　本来は創始の意味であるが、ここでは根拠のないことをするの意。○杜撰　物事をするに粗雑なこと、いい加減なこと。

余説 知行合一の説は陽明学の特色をなすものの一つである。合一の語は二つのものを一つに合わせるようにとれるが、陽明の言うところは、むしろ知行は本来一体であって、別けられぬものとの意味である。彼は行を伴なわぬ知は正しい知でないと見た。宋以後知識が重んぜられ、理論は盛んになったが、儒家における行的方面が閑却されるに至った。それは正しい学問ではないとして、実行と体験の必要を主張したのが陽明である。

「事上磨煉」

4 來書云、事上磨煉、一日之內、不管有事無事、只一意培養本原。若遇事來感、或自己有感、心上既有覺。安可謂無事。但因事凝心一、會大段覺得事理當如此。只如無事處之、盡吾心而已。然乃有處得善與未善何也。又或事來得多、須要次第與處、每因才力不足、輒爲所困、雖極力扶起、而精神已覺衰弱。遇此未免要十分退省。寧不了事、不可不加培養。如何。所說工夫、就道通分上、也只是如此用。然未免有出入在。凡人爲學、終身只爲這一事。自少至老、自朝至暮、不論有事無事、只是做得這一件。所謂必有事焉者也。若說寧不了事、不可不加培養、卻是尙爲兩事也。必有事焉、而勿忘、勿助、事物之來、但盡吾心之良知以應之、所謂忠恕違道不遠矣。凡處得有善、有未善、及有困頓失次之患者、皆是牽於毀譽得喪、不能實致其良知耳。若能實致其良知、然後見得平日所謂善者、未必是善、所謂未善者、卻恐正是牽於毀譽得喪、自賊其良知者也。

通釈 来書に云う、「先生のお説の『仕事をなしつつ修養する。』ということは、一日の間、事の有るなしに拘らず、ただ一心に根本のものを養うことだと存じます。しかし、もし事が起って来て感じたり、または自分の方から感じることがあるような場合には、心中にすでにあることを意識しますから、全く事がないとはいえません。ただ事が落ちつき、心も統一すると、物事の道理はこのようにあるべきものと、大体のことが分るのであります。それ故何事もしないようにしていて、自分の心の全力を尽くすべきであります。しかし、これを処理するにも、うまく行く場合と、そうでない場合とあるのは何故でしょう。また一度に多くの事が起きて来た場合には、順々にこれを処理して行かなければなりませんが、自己の才力の足らないために、常に苦しめられます。力の限り自己を鞭撻しても、精神の方がすでに参っているので、こんな時には退いて十分休息せざるを得ません。むしろ事はなし了えなくても、根本のものを養成することをしなければならないと思いますが、いかがでしょうか。」

君の言う修行は君の学力の程度なら、その通りやってよろしい。が、そこには正しいものから多少はずれている点がある。およそ人が学問するには、一生涯ただこの一つの事だけをすべきである。少年から老年まで、朝から晩まで、事の有無を問わず、ただこの一つの事だけをしなければならない。それは何かというと、孟子の言う「事とする有り。」で修行に邁進することである。もし君の言うように、事はなし了えなくても、根本のものを養わなければならないのであれば、それは事をするのと、根本を養うことが別々にあることになる。必ず常に修行に努めて、それを忘れることなく、無理に力を加えることもなく、事が起ったなら、自己の心の良知を傾けてこれに対応することが肝要である。これが中庸にいう「忠恕道を違ること遠からず。」であって、心の誠を尽くしてやれば、道に合するのである。およそ君の言うような、処理するに旨く行く場合と、そうでない場合とがあったり、困り果てて仕事の順序を誤る心配のあるのは、皆、名誉心や利害打算の念に牽制されて、真に良知を発現することができないからである。もし真に良知を発現することができたなら、今まで善と考えていたものが必ずしも善でなく、善でないと思っていたものが、却って正しかったというようなことを発見するであろう。それはこれまで名誉心や利害の念に引かれて、自分で良知を傷つけていたからに外ならない。

語釈 ○事上磨煉 老・仏が無念無想や静坐澄心など、生活と隔離した修行をするに対し、事をなしつつ修行すべきを説いた陽明独特の修行法。磨煉は磨錬に同じ。○培養本原 良知の涵養を指す語であろう。しかし道通の表現には多少曖昧なところがあり、精神や元気を旺盛にする意味のようにも見える。○事来感 事が来るとは、処理すべき仕事のようであるが、実はもっと観念的なものを指している。○事凝心一 事と心とが共に統一することをいう。○退省 仕事から離れて休むこと。○困頓 困しむこと。

会説 事上磨煉の事とは何であるか、磨煉するものは何か。道通の質問を見ると、弟子らがこれらを理解するに如何に困しんだかがわかる。質問の曖昧なのはよく理解していないからである。答えの中に、陽明が一事の修行だけを説いて、事上磨煉の全体について説明していないことにも注意を要する。事上や事来の事と、「事とする有り。」の事とが、別のことであるなら、後者を説いて前者を説かないのは、問いと答えと焦点が合わないことにもなる。これは恐らく、質問が幼稚なので、多くの論を費やすのを止めて、重要な一事だけを説いたのであろう。

來書に云ふ、事上に磨煉するは、一日の內、事有ると事無きとに管らず、只だ一意に本原を培養するなり。若し事來つて感じ、或は自己の感ずる有るに遇へば、心上既に覺ること有り。安ぞ事無しと謂ふ可けんや。但だ事凝り心一なるに因つて、大段事理の當に此の如くなるべきを覺(得)り會。只だ事無きが如く之に處し、吾が心を盡すのみ。然れども乃ち處(得)して善と未だ善ならざると有るは何ぞや。又或は事の來(得)ること多ければ、次第に與り處するを須要するに、每に才力の足らざるに因り、輒ち困められ、極力扶起すると雖も、精神已に衰弱するを覺ゆ。此に遇へば未だ十分に退省するを要するを免れず。寧ろ事を了へざるも、培養を加へざる可からず。如何。

說く所の工夫は、道通の分上に就いては、也只だ是れ此の如く用ふ。然れども未だ出入の在る有るを免れず。凡そ人の學を爲すは、終身只だ這の一事を爲す。少より老に至り、朝より暮に至るまで、事有ると事無きとを論ぜず、只だ是れ這の一件を做(得)す。所謂必ず事とする有る者なり。若し寧ろ事を了へざるも、培養を加へざる可からずと說かば、卻つて是れ尙ほ兩事と爲すなり。必ず事とする有りて、忘るること勿く、助くること勿く、事物來れば、但だ吾が心の良知を盡して以て之に應ずるは、所謂忠恕道を違ること遠からざるなり。凡そ處(得)して善なる有り、未だ善ならざる有り、及び困頓して次を失ふの患有るは、皆是れ毀譽得喪に牽かれて、實に其の良知を致す能はざるのみ。若し能く實に其の良知を致せば、然る後に平日の所謂善なる者は、未だ必ずしも是れ善ならず、所謂未だ善ならざる者も、卻つて恐らくは正しきを見(得)ん。是れ毀譽得喪に牽かれて、自ら其の良知を賊ふ者なり。

7 格物致知

89 問、格物於動處用功否。先生曰、格物無間動靜。靜亦物也。孟子謂、必有事焉。是動靜皆有事。

問ふ、格物は動處に於て功を用ふるや否や、と。先生曰く、格物は動靜を間つる無し。靜も亦物なり。孟子謂ふ、必ず事とする有れ、と。是れ動靜皆事とする有るなり、と。

通釈 (澄) 問う、「格物とは、先生のお説では事を正すことであり、事とは意の在るところでありますから、心の動くばあいに修行することなのでしょうか、どうでしょう。」先生曰く、「格物をするに、動静の区別はない。静も事に外ならないからである。孟子は『必ず事とせよ』と言ったが、必ずと言う以上、これは心の動静にかかわらず、常に事とすることがある、即ち意を用いることのある意味に外ならない。して見れば、事は動の時だけでないことが明らかで、随って格物は動処に限らないのである。」

語釈 ○必有事焉　孟子の公孫丑上篇にある語。孟子の意は、浩然の気を養うに、集義を必要とするが、それは一挙にできることでなく、常に心がけて忘れずに続けることが必要だというのであり、その絶えず心にかけて努めることを事とすると言った。王陽明は物を事と解したから、孟子のこの語によって、事が動静に関係のないことを明らかにしたのである。しかし孟子の「事」は、陽明の「事」とは本来同じではない。

余説 格物に動・静の区別はないと言うが、事を意のあるところとすれば、意が動くものである以上、動と解釈するのが常識的であろう。静の格物とは何を意味するか、これだけでは明瞭でない。

89 工夫難處、全在格物致知上。此卽誠意之事。意既誠、大段心亦自正、身亦自修。但正心修身工夫、亦各有用力處。修身是已發邊、正心是未發邊。心正則中、身修則和。

工夫の難き處は、全く格物致知の上に在り。此れ卽ち意を誠にするの事なり。意既に誠なれば、大段心も亦自ら正しく、身も亦自ら修る。但だ心を正し、身を修むるの工夫は、亦各〻力を用ふるの處有り。身を修むるは是れ已發の邊にして、心を正すは是れ未發の邊なり。心正しきときは則ち中にして、身修るときは則ち和なり。

通釈 修行の中でむつかしいのは、全く格物致知にある。格物致知はとりもなおさず、心の動きである意を誠にすることに外ならない。意が誠になっておれば、おおむね心も自然に正しくなり、身も自然に修まって来るものである。しかし心を正すと身を修めるとでは、修行の仕方に多少の相違がないではない。身を修めるのは、形に表われるから已発の方であり、心を正すのは、内心のことだから未発の方に属する。随って心の正しいばあいは中であって、身の修まったときは和であるといえる。

語釈 ○大段　おおむね。おお方。○辺　側(がは)。方面。

余説 大学の格物致知と誠意・正心・修身との関係を説き、更に正心・修身と、中庸の未発・已発、及び中和との関係に及んだ。多くのものに共通性を見いだすことは、事を簡単にし、道は一つであることを証するわけで、王陽明の統一的思想をよくあらわしている。

90 自格物致知至平天下、只是一箇明明德。雖親民亦明德事也。明德是此心之德、卽是仁。仁者以天地萬物爲一體。使有一物失所、便是吾仁有未盡處。

格物致知より平天下に至るまで、只だ是れ一箇の明明德なり。親民と雖も亦明德の事なり。明德は是れ此の心の德にして、卽ち是れ仁なり。仁者は天地萬物を以て一體と爲す。一物も所を失ふごと有らしめば、便ち是れ吾が仁の未だ盡さざる處有るなり。

通釈 大学の格物致知から、誠意・正心・修身、斉家・治国を経て平天下に至るまでの八条目は、これを概括して言えば、三綱領の一つである明明德に外ならない。そしてもう一つの綱領である親民も明德の事である。明德とはわれわれのこの心の德のことであって、それは仁である。程明道の語に「仁者は天地万物を一体とするものだ。」とあるが、もし一つの物でも、所を失って宜しきを得ないことがあれば、わが心の仁の充分発揮できない部分があると言わなければならない。この如く、明德はおのずから親民となり、万民をしてその所を得しめるものである。

語釈 ○仁者以天地万物為一体　近思録の道体篇に見える語。

余説 一物もその所を得ないことがあれば、仁に欠けるというのは、仁の完全な実現を期する者にとっての当然の反省である。それをすべての人に要求するのは困難であるが、今日のように他を排して自ら利し、人の責任は追及するが、自らは免れて恥じないものの多い時、こうした広い責任感を各自がいだく世の中であったらと、考えただけでも慰められる説である。匹夫も責めありとは昔の語である。まして国民に主権があるとされる今日、すべての責任を政府や社会にのみ帰して、恬(てん)然としてよいものであろうか。

91 只說明明德、而不說親民、便似老佛。

只だ明明德を說いて、親民を說かざれば、便ち老佛に似たり。

通釈 大学の三綱領の中で、自己の明德を明らかにすることだけを説いて、民を親しみ、人を愛することを説かないなら、それは自己の心以外に出ないで、家も国も天下も無視することになるから、道家や仏教の説と似たものになる。

余説 儒家は本来、人間の本性である仁を、近くから遠くに及ぼし、家庭から郷土・国家・世界と拡大して行くことを根本の教えとする。これを実現するためには、道德・政治・経済など具体的方法を借りなければならない。いわば儒家の教えは決して出世間的でなく、あくまで世俗的であった。しかるに、宋以後の儒学は心性を中心とする哲学的傾向が強くなって、本来の面目と多少相違して来た。陽明にもそれは免れないところであるが、これはそうした傾向への反省の語である。

「致良知」

良知者、孟子所謂是非之心、人皆有之者也。是非之心不待慮而知、不待學而能。是故謂之良知。是乃天命之性、吾心之本體、自然靈昭明覺者也。凡意念之發、吾心之良知無有不自知者。其善歟、惟吾心之良知自知之。其不善歟、亦惟吾心之良知自知之。是皆無所與於他人者也。故雖小人之爲不善、既已無所不至、然其見君子、則必厭然揜其不善、而著其善者、是亦可以見其良知之有不容於自昧者也。今欲別善惡以誠其意、惟在致其良知之所知焉爾。何則、意念之發、吾心之良知既知其爲善矣、使其不能誠有以好之、而復背而去之、則是以善爲惡、而自昧其知善之良知矣。意念之所發、吾之良知既知其爲不善矣、使其不能誠有以惡之、而復蹈而爲之、則是以惡爲善、而自昧其知惡之良知矣。若是、則雖曰知之、猶不知也。意其可得而誠乎。今於良知所知之善惡者、無不誠好而誠惡之、則不自欺其良知、而意可誠也已。然欲致其良知、亦豈影響恍惚而懸空無實之謂乎。是必實有其事矣。故致知必在於格物。

良知とは、孟子の所謂是非の心にして、人皆之有る者なり。是非の心は慮るを待たずして知り、學ぶを待たずして能くす。是の故に之を良知と謂ふ。是れ乃ち天命の性、吾が心の本體にして、自然に靈昭明覺なる者なり。凡そ意念の發するや、吾が心の良知は自ら知らざる者有ること無し。其の善なるや、惟だ吾が心の良知自ら之を知る。其の不善なるや、亦惟だ吾が心の良知自ら之を知る。是れ皆他人に與る所無き者なり。故に小人の不善を爲して、既に已に至らざる所無しと雖も、然れども其の君子を見ては、則ち必ず厭然として其の不善を揜ひて、其の善を著す者は、是れ亦以て其の良知の自ら昧ますこと容からざる者有るを見る可きなり。今、善惡を別ち以て其の意を誠にせんと欲すれば、惟だ其の良知の知る所を致すに在るのみ。何となれば(則)、意念の發するや、吾が心の良知既に其の善たるを知るも、其をして誠に以て之を好むこと有る能はずして、復た背いて之を去らしめば、則ち是れ善を以て惡と爲し、而して自ら其の善を知るの良知を昧ますなり。意念の發する所、吾の良知既に其の不善たるを知るも、其をして誠に以て之を惡むこと有る能はずして、復た蹈んで之を爲さしめば、則ち是れ惡を以て善と爲して、自ら其の惡を知るの良知を昧ますなり。是の若くんば、則ち之を知ると曰ふと雖も、猶ほ知らざるがごときなり。意は其れ得て誠にす可けんや。今、良知の知る所の善惡の者に於て、誠に好みて誠に之を惡まざること無くんば、則ち自ら其の良知を欺かずして、意は誠にす可きのみ。然れども其の良知を致さんと欲するは、亦豈影響恍惚として懸空に實無きの謂ならんや。是れ必ず實に其の事有り。故に知を致すは必ず物を格すに在り。

通釈 「良知というのは、孟子の言う『是非の心は、人が皆持っているものだ。』とある是非の心のことである。この心は、考慮をめぐらさなくても知り、学ばなくてもことのできるもので、それ故に良の知と名づけ、その本能的な真の知であることを示している。これが天命によって人間に与えられた性であり、わが心の本体であって、自然に霊妙な知覚をなすものである。およそわが心に意念が起ったとき、この心の良知の知らないことは全くないのである。それが善であっても、心の良知は知り、不善であっても、心の良知は知る。しかも、それは他人とは全く無関係な、わが心内だけのことなのである。だから小人が不善を行なって、どんなひどいことでも平気でしながら、君子を見ると憚ってその不善をかくし、善い点だけを見せようとするのは、本来人にはくらますことのできない良知のあることを証明するものに外ならない。今意念の善悪を区別して、意を誠にすることを望むなら、ただこの良知の判別する力を充分に発揮させる以外にはないのである。それはもし意念が起ったとき、心にある良知がすでにその善であることを知っているに拘らず、意が本当にこれを好むことができず、却ってこれにそむいて離れるようであったなら、これは善を悪とするものであって、自分から善を知る良知の光を暗くしたことに外ならない。また意念が起ったとき、自己の良知がすでにその不善なことを知っているに拘らず、意が本当にこれをにくむことができず、却ってこれを履行するようであったなら、これは悪を善とするものであって、自分から悪を知ることのできる良知の光を暗くしたことになるからである。もしこのようであったなら、良知は善悪を明知するができても、実際は知らないのと同じであって、意が誠になることがどうしてありえよう。これに反し、もし良知が明知した善悪に対し、或は誠に好み或は誠ににくむことを必ず行なうなら、良知を自分で欺くことがなく、意は誠にすることができるのである。しかしその事実があるのである。それ故、知を致すには必ず物を格すことが大切なのである。」

語釈 ○孟子所謂是非之心云々　告子上篇の語。○不待慮而知云々　孟子の尽心上篇に「人の学ばずして能くする所の者は、其の良能なり。慮らずして知る所の者は、其の良知なり。」とあるに本づく。陽明は良能と良知を合わせて一つの良知とした。○小人之為不善云々　大学の「小人間居して不善を為す。」云々とあるに拠る。○厭然　こっそりと。○影響恍惚　正体がなく、夢幻のように見えること。

余説 良知の説明として孟子を引き、それが是非の心の知であると共に、何人にもある直覚的反射的な自然の識別判断の能力であるとした。しかし単に意念の善悪の判断をしても、意がどこまでもこれを好み、またはにくんで、善を行ない悪を排除することがなければ、良知は致されたことにならず、随って意は誠にならないことを説く。このように、良知を致すことは、是非の判別をすることの外に、意が好悪し、行善去悪を実行することにまで関係するのである。

「万物一体の仁」

12-Ⅳ 夫聖人之心、以天地萬物爲一體。其視天下之人、無外内遠近、凡有血氣、皆其昆弟赤子之親、莫不欲安全而教養之、以遂其萬物一體之念。天下之人心、其始亦非有異於聖人也。特其間於有我之私、隔於物欲之蔽、大者以小、通者以塞、人各有心、至有視其父子兄弟如仇讐者。聖人有憂之、是以推其天地萬物一體之仁、以教天下、使之皆有以克其私去其蔽、以復其心體之同然。其教之大端、則堯・舜・禹之相授受、所謂道心惟微、惟精惟一、允執厥中、而其節目則舜之命契、所謂父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信五者而已。唐虞三代之世、教者惟以此爲教、而學者惟以此爲學。當是之時、人無異見、家無異習。安此者謂之聖、勉此者謂之賢。而背此者雖其啓明如朱、亦謂之不肖。下至閭井田野・農工商賈之賤、莫不皆有是學、而惟以成其德行爲務。何者、無有聞見之雜、記誦之煩、辭章之靡濫、功利之馳逐、而但使之孝其親、弟其長、信其朋友、以復其心體之同然。是蓋性分之所固有、而非有假於外者、則人亦孰不能之乎。

通釈 さて聖人の心というものは、程明道の言った如く、天地万物を一体とするもので、我と人との間に区別を設けないから、天下の人を見るのに、内外遠近を問わず、およそ生きとし生けるものに対しては、皆自己の兄弟か赤子と同様の愛情を持って、これを保全し教化養育して、その万物一体の観念を達しようとしない場合はなかった。世の中の一般人の心も、最初は聖人と異なるところがあるのではないが、ただ自己本位の私情に妨げられたり、物欲の壁に隔てられるために、大きな心も小さくなり、他人に通じた心も塞がってしまい、各人がそれぞれ別の考えを抱いて共通性を失い、その結果、自分の親子・兄弟を見ることまるで仇敵のようなものさえあるに至った。聖人はこの有様を心配して、そのため天地万物を一体とする仁の心を広く推し及ぼして天下を教え、人人が皆、利己心に克ち、心の障壁を去って、各自共通の心の本体に復帰させようとしたのである。その教育の根本は、堯・舜・禹の三帝王が伝授したところの、いわゆる「道心は微弱であるから、心を精一にして、天理を明らかにし、未発の中をよく守れ。」であり、その細目は舜が契に命じたところの、いわゆる「父子の間に親、君臣の間に義、夫婦の間に別、長幼の間に序、朋友の間に信がなければならない。」の五つのことだけであった。堯・舜から夏・殷・周三代の時代には、教える人はただこれだけを教え、学ぶ人はただこれだけを学んで、他に無用の知識を求めることがなかった。また当時は、人によって意見の相異があることもなく、家によって習慣を異にすることもなかった。この状態に安んじ得た人を聖人といい、これを勉め行なった人を賢人といい、これに背いた人は、たとえ聡明なこと丹朱のような人でも、これを不肖の人と名ずけたのである。かくて上は勿論のこと、下は町村の農工商人の賤しいものに至るまで、皆この学問をしないものはなく、ただ各自の行ないをよくし、徳行を完成することだけに努力したのである。というのは、当時は今日のように、雑多な見聞、煩瑣な暗誦、華美な文章、功利の競争がなかったので、容易に親には孝、長上には弟、朋友には信ならしめて、彼ら共通の心の本体に復らしめることができたのであり、外から借りて来たものではないから、妨げるものさえなければ、誰でもできないことではないのである。

語釈 ○以天地万物為一体 礼記の礼運篇に「聖人は天下を以て一家と為し、中国を一人と為す。」の語がある。明道の語もこれに本づく。○凡有血気 ここでは人間のこと。気は呼吸する空気で、血の原とされた。中庸に「凡そ血気有る者、尊親せざる莫し。」とある。○聖人有憂之 孟子の滕文公上篇の語。曰く「人の道有るや、飽食煖衣、逸居して教無ければ、則ち禽獣に近し。聖人之を憂ふる有り、契をして司徒たらしめ、教ふるに人倫を以てす。父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り。」○心体之同然 孟子の告子上篇の「心の同じく然りとする所の者は何ぞや。謂く、理なり、義なり。」から出た語。○道心惟微云々 書経の大禹謨の語。○舜之命契 前記孟子と書経の舜典に見える。○閭井 村閭市井。田舎と市街。○聞見之雑 見聞きすることが雑多で、そのため学問に専心できないこと。現代はラジオ・テレビ・映画・スポーツなどあって、その弊は益々甚だしい。○記誦之煩 記憶暗誦することが多いこと。○辞章之靡濫 真実を離れた、飾りの多い文章が盛んに行なわれること。○功利之馳逐 功名利益を追ひ求め争うこと。

余説 抜本塞源論は、聖人が万物を一体のものと考える仁の心を中心にして展開する。この聖人の心は、聖人のみにあるのではなく、すべての人間も本来そうなのであるが、自我の心と、物欲に妨げられて、発現しないのである。聖人はこの妨害を去って、万人をして一心同体ならしめた。それが堯・舜・禹の教育である。当時の人々はその教育を受けて、固有の姿にかえり、異見も異習もなく、和気に満ちた平和な社会を営むことができたことから説く。

五倫

夫れ聖人の心は、天地萬物を以て一體と爲す。其の天下の人を視ること、外内遠近と無く、凡そ血氣有るものは、皆其の昆弟赤子の親もて、安全して之を教養し、以て其の萬物一體の念を遂げんと欲せざる莫し。天下の人の心も、其の始は亦聖人に異ること有るに非ざるなり。特だ其の有我の私に間てられ、物欲の蔽に隔てられ、大なる者も以て小に、通ずる者も以て塞がり、人各〻心有つて、其の父子兄弟を視ること仇讐の如き者有るに至る。聖人之を憂ふる有り、是を以て其の天地萬物一體の仁を推し、以て天下を教へ、之をして皆以て其の私に克ち其の蔽を去り、以て其の心の體の同然に復る有らしむ。其の教の大端は、則ち堯・舜・禹の相授受せる、所謂、道心惟れ微、惟れ精惟れ一、允に厥の中を執れにして、其の節目は則ち舜の契に命ぜる、所謂、父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有るの五者のみ。唐虞三代の世、教ふる者は惟だ此を以て教と爲し、學ぶ者は惟だ此を以て學と爲す。是の時に當り、人に異見無く、家に異習無し。此に安ずる者之を聖と謂ひ、此を勉むる者之を賢と謂ふ。而して此に背く者は其の啓明なること朱の如しと雖も、亦之を不肖と謂ふ。下、閭井田野・農工商賈の賤に至るまで、皆是の學有らざる莫く、而して惟だ其の德行を成すを以て務と爲す。何となれば、聞見の雜、記誦の煩、辭章の靡濫、功利の馳逐有る無くして、但だ之をして其の親に孝に、其の長に弟に、其の朋友に信にして、以て其の心の體の同然に復らしむればなり。是れ蓋し性分の固有する所にして、外に假る有る者に非ざれば、則ち人亦孰か之を能せざらん。